

日弁連人権擁護大会・シンポジウム感想

10月6～7日の日弁連の死刑制度廃止宣言に対するシンポジウム・大会を見て「何と発想が貧困なのだろう」としか感じなかった。

死刑制度廃止を唱える弁護士の全てが、「冤罪」と「たった一つしかない命の大切さ」「国が殺人をしてはいけぬ」を理由に挙げているが、凶悪な事件を起こした犯罪者の命を守ることしか考えていない。理不尽に殺害された犯罪被害者への思いは微塵も感

じられなかった。執行部の中には、「被害者には経済補償をすれば良い」ととれる発言をした者もいて、非常に腹立たしい思いをした。

口先だけの被害者支援は、私たち被害者・遺族にとっては迷惑なことと知ってほしいが、発想が貧困な日弁連執行部や一部の弁護士には無理なことでしょう。
(副代表幹事／渡辺 保)

「加害者人権擁護大会」なのか

人権擁護大会の前日は台風だったが、当日は晴天となり3泊4日の旅は終わった。

「死刑廃止」宣言との事で、東京から岡村先生をはじめ、高橋、後藤、米田、中村の5人の弁護士さん達、そして松村、渡辺、田村、糸さん達、北海道から山田弁護士さん、大阪から伊藤さん、神戸から土師さん、岡山から加藤さん、高橋が参加した。「死刑制度絶対必要」のビラは、糸さんの娘さんに作成してもらった。立派なビラが出来たものの、ただビラ配りするの芸が無いと、岡村先生発案のチンドン屋さんと共に、派手なビラ配りをする事になった。現地の川上弁護士さんもビックリ！ その川上弁護士さんも弁論に熱が入り、それは凄かった。後藤弁護士さんは、キャリアバックを引きずりながらのビラ配り。その腰の低さに、とても感動させられた。高橋、米田、中村弁護士さん達は、大会で大張り切り。そして、あちこちへと走り回っていた。チンドン屋さんも頑張り、親子連れに出会うと、子供好きの曲を奏で、道行く人は振り返り、バスの窓や二階から覗く人もいた。ポリスさんは見て見ぬふりして見張っていた。僕は関西集会からの幟を2本持って、チンドン屋さんの前や後ろをウロチョロ。最初は、ちょっと恥ずかしかったが、それにも慣れ胸を張って歩けた。死刑廃止論者は、ふんぞり返りビラを受け取らない。気分を害したなあ～！ 山田弁護士さんは、どっしりと構え風格があったなあ～！ 暑いさなかビラ配りす

る高齢の岡村先生を見て、気まずさそうにビラを受け取る若い弁護士姿に複雑なものを感じた。

人権擁護大会は真に乱暴。弁護士総数3万7千余人のうち、たった2%の出席者で、死刑廃止を総意としたのだから無茶苦茶である。チンドン屋で茶化すか皮肉る他ない。大会は「加害者」と言う3文字が欠落していた。今後は「加害者人権擁護大会」とすべきだ。これが日弁連流の民主主義かと嘆くばかりだった。
(幹事／高橋幸夫)



日弁連シンポジウムを垣間見て

日弁連シンポジウムの第三分科会「死刑廃止と拘禁刑の改革を考える」が、10月6日福井市で開催された。会場へは、街頭署名活動時に首へかけたオレンジ色のスカーフ、死刑制度廃止反対のチラシを貼り付けたゼッケンを身につけて陣取った。

討論は死刑廃止へのシナリオ通りに進んでいき、やがて流されたビデオメッセージから「殺したがる馬鹿ども」という瀬戸内寂聴氏の被害者の気持ちを踏みにじる暴言が聞こえたとき、憤りは頂点に達した。その内容を承知で流した日弁連の被害者に対する認識がこの程度なのかと失望した。

翌日は、後列の隅に設けられた傍聴席に座った。岡村顧問は、制限時間の3分をはるかに超え17分

間、最初の裁判参加裁判で被害者側の弁護をした村田智子弁護士、VSフォーラムの先生方が、一矢を報いるべく死刑存置の熱弁を奮った。傍聴人であったが、思わず拍手をした。日弁連は、死刑制度廃止の理由の一つとして「人は変われる」をあげていたが、先日、死刑執行された死刑囚は、8年間に2回殺人を犯している。身勝手な理由で、躊躇せずに善良な人達を3人も殺傷したのに、罪の深さも考えず、何の反省も後悔もせず8年間何を考えて生きていたのだろうか。やはり人間性の本質は「変わらない」のだ。犯した罪に見合う死刑制度を絶対に廃止してはならない。
(会計監査/田村紀久子)

岡村先生の一言

岡村先生は、出発日の午前中に定期検診があり、集合場所である東京駅へはお嬢様と見えました。一行は先生が無事に戻ることをお嬢様に誓い新幹線に乗り込みました。福井まで米原乗り換えで約3時間半、到着時は日没近くでしたが、台風一過、駅前で恐竜フクイサウルスが首を動かして出迎えてくれました。

宿泊先のホテルには、他方面から幹事、会員さんがすでに到着されて、幟一式、ゼッケン、シンボルカラーのスカーフと配布用ビラなどの備品も届いており安心しました。

夕食は、日弁連の死刑制度廃止宣言の話はありましたが、心許しあえる間柄の和やかな宴となりました。引き続き、幟の準備をしましたが岡村先生の「私の葬式には棺の上にこの幟旗を

掛けてよ」との冗談交じりの一言に苦笑しながらも、岡村先生の被害者運動へ懸けてこられた深い想いを改めて感じました。その晩もベッドの中で、翌々日の大会での発言内容を何度も練り直されたようでした。当日、会場内に響く岡村先生の力強い声を耳にして、死刑制度存置への思いを強くしました。

(事務局/桑千賀子)

